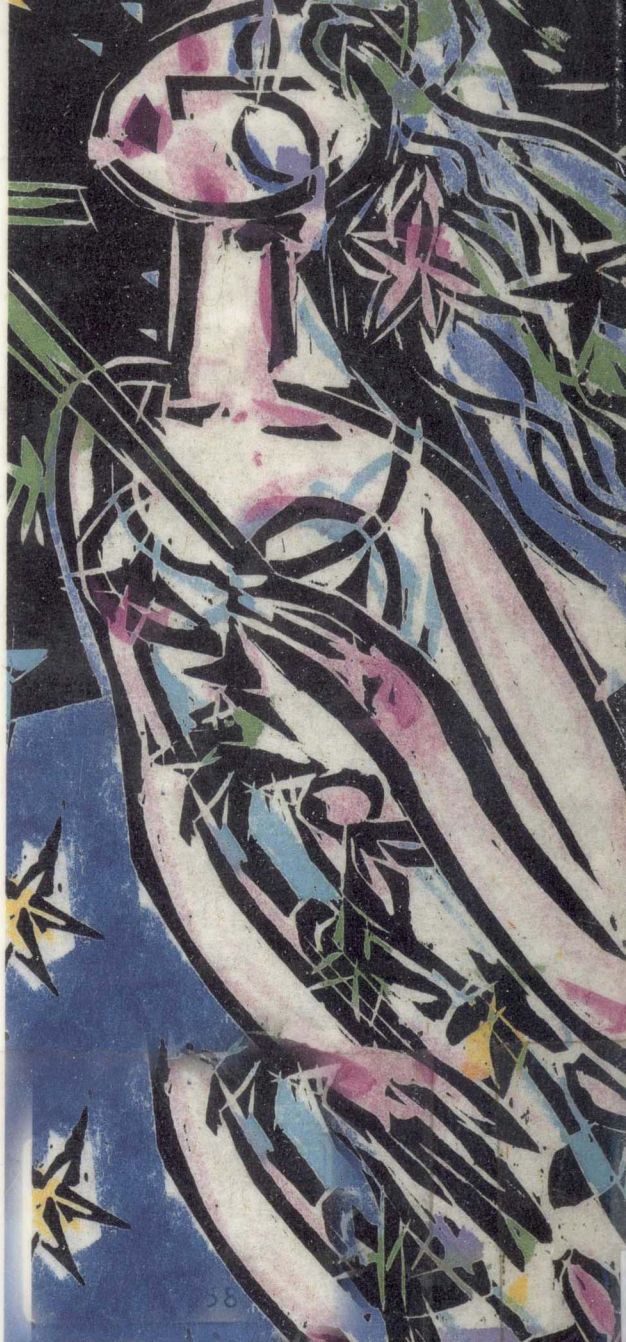


大城立裕 短編集

# 後生からの声

ぐ  
しょう



# 生からの声

短編集

大城立裕

文藝春秋



後生ぐしやうからの声

一九九二年九月二十五日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 大城立裕おおしろ たつひろ

発行者 阿部達児

発行所 株式会社 文藝春秋  
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―三

印刷 大日本印刷  
製本 矢嶋製本

© Tatsuhiko Ohshiro 1992 Printed in Japan  
ISBN4-16-313470-0

万一落丁乱丁のあった場合は送料当社負担でお  
取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

短編集・後生からの声 目次

迷路 5

無明のまつり 63

厨子甕(ずしがめ) 147

巫道 209

巫女の風土——あとがきにかえて

272

カバー・扉絵  
装幀 宮川一郎  
名嘉陸稔

短編集

後生ぐしやうからの声



# 迷 路

ちよつと奇妙な光景には違いなかった。大病院の廊下を、松代が両手いっぱいいろいろの物を持ち運んでいる姿である。

混血といつても、髪は金色で肌は白く、眼の色は灰色、鼻がずばぬけて高く背も高いから、見たところはほとんど完全にアメリカ人である。ところが、ブラウスの生地は琉球絣を使っているところが、まず人目をひく。それはアメリカ人にも、ときにはそういう変わった趣味の持ち主がいることはあり得る。しかし、青いポリバケツに溢れんばかりの所帯道具をつめこんで片手にさげ、他の片手にはハンガーに色とりどりのブラウスをさげたのを三本もかさねて持ち、曲がりくねった長い廊下をせかせかと行ったり来たりしている姿は、どう見ても沖縄娘である。

行ったり来たりというのは、廊下の道筋に迷うからであつて、分からなくなると誰彼をつかまえて尋ねる。

「内科二十二号室はどこだったですかねえ？」

ホステス仲間の佐知が入院したので、その手伝いをしているのだが、松代は三十にもな  
って自分の身のまわりすらうまく片づけきれないので、この手伝いは手にあまる。それで  
も気だけは一所懸命で、冬もまだ終わりがらないというのに、汗をかきかき一日がかりで  
運んだ。

「なんで、そんなのまで……」

佐知は熱でうるんだ眼で、ときたま見咎める。ポリバケツや洗剤はまだいいとしても、  
入院生活にブラウスを三着も持つてくることはない。ハイヒールの靴やスカーフなども、  
どうかと思う。だから、億劫ながらもつい言うのだが、

「でもさあ、これ、あんたがいちばん好きなものだと思うからさあ」

松代はうまくやったつもりなのである。

二人は小さなクラブでいっしょに働いている。スカーフやハイヒールなどは、ホステス  
としての誇りにかかわる制服みたいなものだと思得ている。

「でもさあ、退院するときは、そのときになって取ってくればよいし」

それもそうかと思いいながら、なにしろ思いついたら放っておけず、思いなおしがなか  
か利かないのである。

でも、言われてみれば素直に、それではと、あらためて持ち帰ろうとするから、  
「置いておけばいいさあ」

佐知は体温計を腋からとりだしながら、けだるそうに言う。風邪をこじらせて肺炎になつての入院だから、楽ではない。

松代はそれに同情して一所懸命だが、そのわりには、氣をつかわないところがある。

「また道を間違えてね」

三回目に来たとき言った。

アパートは都心で、病院は郊外にある。とはいえやはり那覇市内で、道を間違えるほどのことはない。

松代のいう道とは病院の廊下のことである。なにしろ大きな病院で、病棟も松代にいわせると数えきれないくらいある。婦人科の人が内科に行ったら大変だはずね、と言ったことがある。佐知がはじめて病室にはいったとき、廊下を歩きながらのことで、看護婦といつしよだから、佐知はだまって、ばかばかしいという顔をした。ひとが熱をだしているというのに、という氣もあった。

「救急診療所のように太い線を延ばしてあるとよいのにね……」

あれは絶対に間違えないですむ、と松代は強調した。なにしろ、玄関からいきなり赤や青、黒、黄などのビニール・テープを廊下に貼りつけてあつて、いろいろの部署に間違いなく誘導する仕組みになっているのだ。夜中にそこへ行くと、不気味なくらい実感がある。「夜でも間違えないよ」

病院の廊下の道順を間違えるのに夜も昼もないはずだと、佐知がやはり黙っていると、昼間は看護婦が往来しているから、分からなくなればいくらでも尋ねることができる、それでも間違えるのだ、と強調した。

「たぶん、看護婦がみんなおなじ制服を着ているからだはずね」

こうなると、間違えるのは道順のことか看護婦のことか判然としないが、松代のなかではどちらも大きすぎる病院にくつついたもので同じだという感じがあった。佐知はそのことには気づかず、ただ物憂くうなずいた。

「看護婦はみなおなじ制服を着ていると、みな頭がいいように見えるさね」

松代が何にこだわっているのか佐知も理解できないが、そのまま返事をしないでいると、松代はそのうち一人の看護婦と口論をはじめた。

ベッドの方角がよくないから変えてよいかと、松代が言い出したのが、きっかけである。規則ですから、そんなことはできません、と看護婦は答えた。背が低くこぢんまりと利口そうな顔立ちをしていた。その言いかたはすこしツンとしている。私は背が高いほうだから、あのひと負けるような気がしたはずねと、松代はあとで解釈をつけた。

「あんたねえ、規則規則というけど、病院の規則とこのひとの命とどちらが大事ねえ？」

「はあ？……」

看護婦はあきれたり怒ったり、その両方をどう始末したらよいか分からない、という顔

で、

「オーバーね」

病室にはベッドが八つあって、空きがない。その患者たちがいっせいに二人に注目した。

「みんな、これでちゃんと治って元気になって退院したんです」

「これからもあんた、保証できるね？」

看護婦はこうなると、他の患者に気をかねて、気味がわるいという顔をした。

「患者でも看護人でも、そんなことを言う人ははじめてです」

言うなり、体温計をポケットに投げこんで出ていってしまった。その胸につけた青いプラスチックの名札を、松代はしっかりと頭にきざみつけた。仲宗根芳江とあった。

看護婦の後ろ姿を見て松代はおもしろくなかった。大きな病院で看護婦が真っ白な制服制帽に身をかためて働いている姿を見ると、羨ましくてならない。尊敬してしまう。医者でなくても病人をまかせられるという気になる。廊下の道筋の複雑さに自分がまごまごしているときでも、さっさと歩いている看護婦は堂々としていて見事だ。そういう看護婦が実力を発揮するなら、ベッドの規則などどうでもよいではないかと思うのだ。むしろ、その規則を人間の命のためになるように作ってあてはめるのが、看護婦の務めではないか。仲宗根芳江の態度はまるで逆ではないか。

「あれでも看護婦かねえ……」

松代は窓によった。七階である。まっすぐ向こうの遠くに大きな森がある。下の大通りをバスや乗用車が小さな虫のように走っていた。首を出してそこを見下ろし、

「ここから落ちたら大変だはずねえ」

佐知はこれにも黙った。

佐知の病気が気管支肺炎と診断されたことと、松代の思惑とは、いま関係がない。入院したとなれば、どんな病気でも命取りになりかねない、と彼女は心配している。そして、病状や検査や診察がどうであれ、病人は環境をよくし心を落ちつかせることが、快癒のための第一条件だと考えている。彼女を育ててくれたお祖母さんの教えを、そのまま忠実に信じこんでいるのだ。ポリバケツを大事に思ってたってきたのも、決して偶然な粗忽でしただけでなく、病室といえども掃除は必要であろうと考えたにすぎない。掃除婦が病院についていることや、病室のサイズのことまで考え及ばなかった。

その環境ということのなかに、枕の方向は重大な要素として関わっている。

「この枕はイリマックワ（西向き枕）さねえ」

松代は嘆息を禁じえない。枕を西向きにすると死ぬ、という昔からの言い伝えを教えられてきた。その縁起をかつぐ思いと、窓のそとにたいする高所恐怖症とが、重なったものらしい。佐知のベッドが窓際にあることも、影響しているかも知れない。

「病院はヒヌカンあるかねえ？」

松代は、佐知の気分などへこだわらずに訊く。そんなもの、あるわけないでしょ、と佐知が答えると、

「だはずねえ。でも……これだけの病人をあずかっているくせしてねえ」

いかにも見下げのような口吻をもらした。ヒヌカンとは火の神のことで、つまり竈の神である。先祖とヒヌカンをたえず重んじ拝んでこそ、家庭の運、家族の健康は保障される。だから、竈がなくなり灰が求められない時代になっても、多くの家でガスレンジの奥の小さなスペースに小さな香炉をそなえ、紙屑や板を燃やして灰をつくって盛り、お線香をささげる。病院にもヒヌカンがあるならば、松代は自分でそこを拝むつもりでいた。

佐知は自分のアパートにはヒヌカンなど設けていないのだということを黙っていた。そして、ただ言った。

「看護婦と喧嘩しないでよお」

「うん、うん。ごめんねえ。夜になったら順子がうまくやるはずだからねえ」

順子はクラブで二人と仲良しであったが、一年前にホステスをやめて洋裁店をはじめた。これは三十をすこしはみ出している。夜は佐知の看護を交替してくれることになっている。ただ、夜勤の看護婦は別の人であることを、松代は忘れている。

夕方になって松代が帰ったあと、こちんまりした看護婦の仲宗根芳江が検温に来たついでに尋ねた。

「あのお友達、ハーフなんですか」

「ええ……」

看護婦が何を訊こうとしているか測りかねて、佐知は眼でうなずいた。

「変なハーフですね」

佐知は眼だけで笑った。

店に来る客のほとんどが言うことであつた。松代は見た感じではまるで白人なのに、英語を全然しゃべれない。英語どころか、共通語よりむしろ沖縄語（うちなぐち）のほうがりまいかも知れない。なにしろ、三つのときに父親の白人兵はベトナムへ行つて戦死し、一年後に母親は黒人兵といっしょになつてアメリカへ渡つてしまい、そのあと読谷（よみたん）の田舎でお祖母さんに育てられた。小学校にあがる頃からはお祖母さんの線香作りの手伝いをして、上級生になると空き堀買いのアルバイトもした。料理もチャンプルーとかンブシーとか、沖縄の料理しか作れない。ステーキなど見たこともなかったし、クラブで働くようになってから客に奢られることはあるが、おいしいとは思わない。パンも好きではない。——そんなことを松代は、自分でもおかしそうに、しかし気取りもなく誰彼に話す。

そのようなことよりしかし、もっと客の気をひく話がある。松代の頭はすこし神がっているのだ。ひとの大きな不幸を予知できる、という。なぜか、その人間の姿がうすぼんやりとかすみ、チラチラと、たとえば陽炎に包まれているような感じがすることがあつて、

同時に松代自身うつとうしい気分になると、幾日かあとにその人が大怪我をするか死ぬか、という目にあう。仲間たちは誰もがその話を聞いていて、半信半疑でいたが、あるとき松代が佐知に「あの人、姿がうすい」と囁いた。それは健康そうなボーイのことであったが、その男は一週間ほどたつて、天氣がわるいのには沖釣りに出たまま、舟がひっくり返つて死んだ。それ以来、誰もが松代に一目おいている。

松代にとって、その神がかりの初体験は七歳の年の冬であつた。

母親に会いたいと思つたのが、前触れだったといえようか。お祖母さんにはこの上もなく可愛がつてもらつていたし、貧乏にも慣れてはいたが、無性に母親を恋しく思うことが、その前にもあつた。母の顔はかすかに憶えていた。その冬のある日、母に会いにアメリカに行こうと思つたのと、ひどく頭痛がしてワサワサと訳の分からない不安に満たされたのと、どちらが先であつたか。何かに促されるように家をとびだして、氣がついたら裸足で五十八号線（当時は日本復帰前だから一号線だ）を北へ北へと歩いていった。寒風に耐えながら、アメリカへ向かっているのだ、と思いつめていた。アメリカの車に無数に追い越されながら、それがアメリカに向かつている証拠のように思つた。三日間も食事をせずに歩きまわり、その間、誰にも教えられずに訪ねたのがいくつかの村の多くの拝所で、ちゃんと手をあわせて拝み、そのつどアメリカにそれだけ近づいているのだと信じた。そして、三日後にはお祖母さんの前に舞い戻つた。お祖母さんは何も言わずに、松代をただ抱きし